

「キャンパス内のカルト問題」を考える①

グローバル化と現代宗教 信教の自由をめぐる

北海道大学大学院文学研究科

教授 櫻井 義秀
(やゐらい よしひさ)



一、大学のカルト対応

カルトとは正体を隠した勧誘や強引な布教活動によって違法な活動に若者や主婦を巻き込む宗教団体のことをいう。根拠のない心理療法やヒーリングを行うサロン、ネットワーキングビジネス、過激思想の政治団体もカルト的特徴（精神操作、集団催眠、指導者崇拜、主体主義など）を持つが、大学では

新入生や就活生を狙う特定教団の活動を問題視している。

オウム真理教の後継団体であるアレフ（信者約千六百五十名）、ひかりの輪（同百数十名）や靈感商法・正体を隠した勧誘で社会問題

化した統一教会（本体は世界平和統一家庭連合に法人名を変更、大学組織は原理研究会C A R P、活動信者は数万人）は、いまだに勧誘活動を続けている。

大学生は一昔前まで大人とみなされたし、特定の思想信条や信念体系を信じるかどうか個人の自由と考えられた。ところが、現在の新入生は大半が明らかに高校四年生の域を出ない。本人はもとより学費支援者も高校並みの指導や保護を求めていることが少なくない。しかも、オウムや統一教会に加えてサークルや学習団体を装う摂理（韓国出自のキリスト教系新宗教）、親鸞会（ダミーサークルで勧

誘）や顕正会（長時間に及ぶ強引で執拗な勧誘）、信者獲得・教会成長を使命とする特異なキリスト教団体などが、手ぐすねひいて待ち構えている。新入生のオリエンテーションにおいて「カルトにご注意」と言わないわけにはいかない。

二〇〇九年に「全国大学カルト対策ネットワーク」が結成され、現在百七十校を超える大学が参加してキャンパス内勧誘の実態と対策にかかわる情報交換が行われている。そこで、最近対応が難しい問題が二つ生じている。一つはキャンパス内での対面的接触（友人同士やサークル内勧誘を含む）よりも、SNS（ソーシャルネットワーク・キングサービス、インターネット上でのやりとり）による勧誘が増加していることである。スマホをひとときも手放さず、インターネット上から情報を収集し、そこで多くの知人・友人とラインでつながっている学生たちを特定サイトに呼び込んだり、なりすましで接近した後に信頼関係を築いて勧誘したりする手口をカルトが使うようになった。もう一つは、二世信者の増加であり、カルトに入

信した可能性が高いという情報や相談を受けて大学が親に連絡すると、信教の自由を侵害するつもりかと弁護士を介してクレームを突きつけられるような事態も生じている。

私は、大学でカルト対応を迫られる教職員、子どもを大学に送り出す保護者に向けて、二〇一二年に編著『大学のカルト対策』（北海道大学出版会）を刊行した。そこで、カルト問題の宗教社会学、キャンパス内の勧誘実態と対応、対応の法律的な根拠、最近のカルトによる勧誘手法、カルト団体への訴訟を研究者、実践家、弁護士が解説し、日本学生相談学会第三十回シンポジウム「カルト問題・学生相談との関連」を収録し、カルト・カウンセリングに詳しいカウンセラーや臨床心理士、学生相談に実績のある教員が具体的対策を提言している。

私はこのような書籍を刊行するほか、大学や市民向け講演でもカルト問題への対応を語ってきたのだが、最近カルト対策の進展に伴う副次的効果を考えるようになった。

二、カルトと宗教のあいだ

どのような宗教も生まれたときはカルトだといった俗論はよくとして、カルトは生来の悪徳集団であって宗教とは本質的に異なるとまで言えるかどうかは考えておくべき問題である。大学ではカルトを明確に一般の宗教団体とは区別している。基準は当該団体による違法行為と巻き込まれることで学生・学資支援者に生じる不利益の有無である。そして、大学は在学契約に基づいて学生の安全な学習権を確保する義務があるために、信教の自由や自由な意思決定を阻害する勧誘行為を禁止することができると考えている。

仏教の各宗派も付属学校や檀家に対して「カルトにご注意」の啓発ビラを配布したり、相談窓口を設置したりすることもあるだろう。その際、大学と同じ基準で生徒や檀家への保護的態度を取ることもありうると思うが、「カルト」「マインドコントロール」の中身を十分に考えておく必要がある。私が日本全国で最もよく受ける質問は、「創価学会はカルトです

か」というものである。宗教者であれ市民であれ、質問者はカルトであると確信し、私に「カルトですな」とお墨付きを期待している。私は、カルトの外形的特徴（正体を隠した勧誘、人権侵害や献金強要を伴う違法行為等）の有無をその人に確認した後、「それがなくてもカルトという根拠は何ですか」と尋ねることにしている。「信者はマインドコントロールされている」という答えがあれば、「信者はどのようにマインドコントロールされているのでしょうか。それを解くためにあなたは何をされたいのですか」とさらに尋ねる。キョトンとされるか、櫻井は創価学会シンパであると憤慨されて終わる。

特定教団をカルトであると言うことは、その団体が宗教的多様性を構成する一つの教団というよりも宗教そのものへの信用を損ね、一般市民にも重大な危害を加える団体であるから、何らかの対処が求められるという主張をすることに等しい。明確な根拠と覚悟を持って実践的な活動をする気がなく、あれはカルトだねという言い

方をするのは気晴らしに過ぎない。もっと言えば、自分はまともな宗教もしくはまっとうな世間に属するまともな人間であるという自尊心の表明ともとれよう。

実のところ、カルト団体は自分だけは大丈夫と思っている人を勧誘することに長けている。人生の根拠、世界の行く末などをまともに議論して自信を突き崩すことも可能だし、自分が所属している集団をカルトとは絶対思わないのであるから、その人は欺されたことに気づかない。

私は、カルト対策の進展によって多くの人が思考停止する可能性を危惧している。

カルトと宗教の間にはグレーゾーンがあり、そこに属する教団が少なくないし、既成宗教の側でも深刻なセクハラ事件や金銭の私的濫用なども見られる。マインドコントロールと教化の間にもグレーゾーンがあり、信仰・信心によって心が自由に解放されるかどうかはよくよく観察されなければならぬ。多くの宗教者はこうした「間」の問題に敏感であり、自戒を

怠らないはずである。その欠如がカルトの教祖を生み、隷従を信仰と誤解させられる信者を生み出すのである。

カルトのレッテルを付けて安堵してはならない。なぜ宗教団体がカルト化するのか、なぜ人はカルト的な集団に惹かれていくのかを、宗教集団と人間の問題として問い直すことが宗教の側には求められている（櫻井義秀『カルト問題と公共性』北海道大学出版会、二〇一四年）。

●プロフィール

櫻井 義秀（やぐらゐ・よしひこ）

一九六一年生、山形県出身。一九八七年北海道大学大学院文学研究科博士課程中退、二〇〇四年から北海道大学大学院文学研究科教授、現在総長補佐・学生相談室長・特別修学支援室長・ハラスメント相談室長。専門は宗教社会学、タイ・東アジアの宗教文化論、カルト問題研究。著書・編著に『東北タイの開発僧』『タイ上座仏教と社会的包摂』『アジアの社会参加仏教』など多数。

